
ゆりゆり☆ロマンティックナイト

財禅@百合姫志望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆりゆり☆ロマンティックナイト

【Nコード】

N4009L

【作者名】

財禅@百合姫志望

【あらすじ】

秘密の花園で深夜のお茶会、二人は運命の星の下で……………

(前書き)

百合姫投稿作品の漫画プロットです^^

「今夜11時にね。絶対来てよ」

聖百合女学院・屋上にあるステンドグラスの温室は、生徒会長の愛玩人形だけが合鍵を許された秘密の花園。

そこでこんな時間にお茶会なんて、本当に海千瑠ってば…。

いいえ、そそくさ呼び出される時点で私も相当どうかしてるのだ、すでに。

温室中央・白い円卓の真上には、銀盆の満月。

冴え渡る11月の冷気を纏い、ふたりだけの静寂を囲む。

くゆらせたダージリンから瞳をあげて、蕾ひらく海千瑠^{みちる}の唇。

「一緒に伝説を始めましょう、都貴^{とく}」

「なあに、それ」

悪戯っぽい、でも、吸い込まれそうな碧眼。

「わたし、貴女が好きよ」

思わず目をそらす。

海千瑠はいつも、私の視界の先にいた。

いいえ、両目を潰したって彼女を全身で捕らえることが出来る。

そんな歌劇みたいな物言いが、すんなりくる華だった。

楽しそうなため息と一緒に、海千瑠の細い指先が白磁の小壺に伸びる。

小さな銀の匙で優しくカップに落とす、ひとつ、ふたつ、みつつ…。

「ねえ、紅茶に砂糖じゃなくて金平糖入れるの？」

「都貴もよ。金平糖、入れてよ。今夜は、特別な夜だから」

ほらね、こういうところが好きで嫌い。

「私はそのまま戴きます。」

差し出された小壺から指で直接、星砂糖をつまみ上げる。

「意地っ張り……。いつもそう、私にだけ頑固だわ。貴女は」

抗いきれないと、分かっているのに。

「誰かさんの猫みたいな気まぐれに付き合っただけで、人格者よ」

ほんと嬉しいって、見透かされてる。

掌で。ころころ金平糖を遊ばせるように…。

「ねえ、見て！」

キラキラ勢いよく、海千瑠が天上を指し示した。

白い閃光。

瞬きのシュプール。

…流星群！

「うそ・・・」

ポカンと上向いたままの私に、魔女は呪文を繰り返す。

「伝説を始めましょう、都貴」

驚くほど鮮烈な一瞬に、海千瑠をみる。

ああ、今こそ悟った。

海千瑠はずっと、私を捕らえたままなのだ。

ふたりきり、満天の星の聖唱、この千夜一夜。

「この温室で流れ星を見た二人は」

睫毛が笑み艶やかな碧眼が深みを増した。

冷たいアマリリスの匂いが一層鮮やかになる。

白い手が交差して隠れた口許に。

穏やかな勝算と運命の微笑。

海千瑠。

「恋に落ちて、しまうのよ」

思わず指先から離れた金平糖が。
紅茶に溶ける魔法の音を：

今なら聞こえる気が、した。

（1128文字）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4009/>

ゆりゆり☆ロマンティックナイト

2010年10月21日23時30分発行